

第 61 回(2011.11.21 配信)

雲竹齋先生の歴史文化講座－「中東・アラブ社会 (9)」

預言者の後継者をめぐって(宗派)

イラク問題でもイランの核問題などでも「シーア派」という言葉がマスコミにたびたび報道されるから、シーア派はイスラム教徒の大部分を占めていると誤解している人も多いようだが、シーア派は全イスラム教徒のおよそ 1 割に過ぎない。ほとんどのイスラム教徒はスンニー派(スンナ派)と呼ばれる宗派である。なぜ 1 割に過ぎないシーア派がマスコミによく登場するかといえば、現在世界に注目されているイラクもイランも国民が主としてシーア派イスラム教徒だからである。

処刑されたイラクの故サッダーム・フセインは、シーア派が多いイラクでイスラム教の主流派であるスンニー派だった。フセイン体制が崩壊して、同じシーア派であるイランの影響が強まることにアラブ諸国は警戒している。その理由はアラブ民族国家のイラクがペルシャ民族であるイランの影響を強く受ければアラブの結束に亀裂が生じること、またイランの急進的な思想がアラブ各国に影響することを恐れていることなどからである。

イスラム教の宗派はハワリージュ派、スンニー派とシーア派に大別される。ハワリージュ派は、カリフ(預言者の後継者)はムハンマドの親戚縁者ではなく広く一般の信者から選ぶべきだという考えで、アズラク派やイバード派などの分派があるが、現在では信者が極めて少数になってしまった。

スンニー派は、イスラム教徒の大部分を占めている宗派である。スンニー派を正統派と言っている人もいるが、それはシーア派が第 4 代カリフ(預言者の後継者の意)のアリーとその子孫が正当なカリフだとする一派で、かつ少数派だからであろう。第 4 代カリフのアリーは預言者の従兄弟で預言者の娘ファティマの婿だという説もあるが、第 3 代カリフ・ウスマーンの家系であるウマイヤ家のムアーウィアと争って第 4 代カリフに就任した。ところが、アリーはハワリージュ派によって暗殺されてしまい、これによりウマイヤ家がカリフを世襲して、ダマスカスを首都とするウマイヤ朝(667～750)を成立させた。アリーの支持者たちは、アリーの子供ホセインを擁してイラク南部のカルバラの平野でウマイヤ家と戦うが、西暦 680 年 10 月 10 日衆寡敵せず敗退した。この悲劇によって、イスラム歴の 10 月 10 日は「アシュラ」といってシーア派の「服喪の日」となっている。

シーア派は、後継者をイマームと呼び、神によって任命された最高権威者とした。もともとイマームとは、金曜日にモスクにおける集団礼拝の先導者であり、そこから転じて指導者の意味に使われるが、シーア派にとっては現世における最高の権威を持つ者とされている。なお、9 世紀ごろよりイスラム帝国が衰退しはじめて多くの王朝が興ったが、それらの君主はカリフではなくスルタンの称号を用いた。イスラム教の長は預言者の後継者であるカリフを名乗ったが、特に 11 世紀以降カリフの存在はイスラム世界の精神的な長の名称にすぎず、君主たちは王朝の支配者という意味のスルタンの称号を、カリフから与えられ、政治的権力を委任された、という形式をとった。

礼拝や断食をしないイスラム教徒(シーア派の分派)

シーア派は第4代カリフ(預言者の後継者)のアリーとその子孫が正当なカリフだとする一派だと説明したが、このシーア派にはたくさんの分派がある。そのなかでも、アリー以前の3代のカリフを含めて一切のカリフの権威を認めないとする12イマーム派が多数派である。この宗派は、イランでは圧倒的多数で、イラクやバハレーンでも過半数であり、レバノン、シリアにも若干信者がいる。この12イマーム派のなかから、第7代イマームは第6代イマームの長子イスマイルが正統とするイスマイル派という分派ができた。この一派は10世紀には北アフリカで勢力を伸ばし、アッバース朝を打倒し、エジプトでファーティマ朝(973~1171)を興すが、ファーティマ朝が衰退するとともに、この宗派からムスタリー派とニザリー派が分派した。

ムスタリー派は、イエメンやインドに移り、ニザリー派はシリア北西部、イラン北東部、アフガニスタンやインド、東アフリカなどに点在する。この派はイラクやシリアの山中から暗殺団(アサッシン)を送り出したことで有名になった。アサッシンとは、ハシーシー(覚醒剤)からきた言葉で、ハシーシーを飲んで興奮状態を高め暗殺を行った。

同じくイスマイル派の分派が、アラウィー派とドルーズ派である。アラウィー派は、別名ヌサイリー派とも呼ばれ、極度にアリーを神格化するが、東方キリスト教会からも多くの儀式を取り入れた。現在、シリア北部山岳地帯に多く、シリアのアサド大統領がこの宗派であり、スンニー派イスラム教徒が大部分を占めているシリアの政権はこの宗派出身者で固められている。イラクの独裁者だったサダム・フセイン元大統領は、イラクでは少数派のスンニー派で、アサド大統領がシリアでは少数派のシーア派の出身で、どちらも少数派の出身というのがおもしろい。

ドルーズ派という一派は、シーア派のなかでも独特の宗派である。イスマイル派のファーティマ朝カリフ、ハーキムを「隠れイマーム」とする一派だが、一日5回の礼拝もしないし、メッカ詣でもせず、ラマダーンもしない。南部レバノン、シリア西南部に多い。

そのほかに、ザイド派という一派がある。スンニー派に極めて近い信条や戒律で、イエメン北部では支配的である。全イスラム教徒の1割にすぎないシーア派だが、このように多くの分派があり、非常に複雑である。

《閑話》 イスラム教原理主義と呼ぶのは正しくない

友人から「イスラム原理主義組織っていうのがあるが、原理主義ってなんだ？」と聞かれた。説明しようと思ったが、横にいたもう一人が、「そりゃ、おめえ、タリバンやヒズボラなど、あっちこっちで戦闘を引き起こしている連中のことだろう」と言った。それで、「ああそうかあ」で、この話は終わった。

しかし、それは正確ではない。宗教上の「原理」とは大変難しい問題である。たとえばキリスト教においては『聖書』の記述を絶対的に信じて現代科学を信じない人たちがいる。こういった人々を原理主義者という場合があるが、そういう意味においては、イスラム教は原理主義そのものであって、十数億人いると言われているイスラム教徒全員が原理主義者である。したがって、イスラム教に原理主義という言葉を使うのは正しくない。あえて言うならば「イスラム復興主義」とでも言うべきであろう。

それは、近代化を図りながらも西欧社会を否定し、イスラムの教えに忠実な社会を目指すことを主張する。つまり、預言者ムハンマドが目指したイスラム共同体(ウンマ)を興し、イスラムの法(シャリーア)に厳格な社会を目指すもので、スンニー派(ワハーブ派)のサウジアラビアやシーア派のイランが代表的な国である。したがって、アフガニスタン問題やイラク戦争などでよく登場したタリバンやパレスチナ問題で登場するヒズボラなどの組織は、原理主義ではなく「急進派」あるいは「過激派」とでも呼ぶべきである。

スンニー派の分派であるワッハーブ派は、サウジアラビアの国教となっているが、18世紀にアラビア半島で復古主義者ムハンマド・イブン・アブドゥル・アル・ワッハーブによって提唱された。これは耐乏と簡素な生活を主張し、イスラムの純化を図る思想で、現国王家のイブン・サウード

家と同盟し支配権を得た。したがって、サウジアラビアの法律はイランなどと同様に厳格なイスラム法によるから、犯罪もイスラム法にのっとって裁かれる。

また、スーフィズムというイスラム神秘主義がある。修道僧的禁欲主義で、スーフィとはアラビア語で羊毛を指す言葉だが、修道僧が着ていた羊毛で作られた粗末な衣服から命名された。現在のトルコのイスラムはこの影響が強いという。自らを厳しく律することで神の意思に同化することを求める極めて厳しい修行をする集団である。

こういったことは、友人たちには説明しない。彼らの脳みそでは、このような微妙かつ難しい話は理解できないことが分かっているからだ。理解させようとするれば、単純な脳みそが沸騰して、こちらが火傷する。一文の得にもならないのに、あえて火傷まですることはしないのだ。